

洛友会会報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

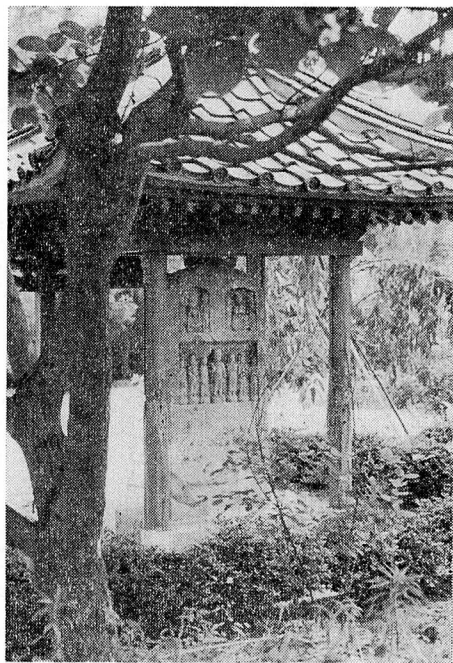
こま犬神社

日本電話施設(株)会長
大正十三年卒 本多 静雄



私は戦後、生れ故郷の愛知県猿投山麓に帰ったところ、子供の頃には気の付かなかつた古い陶器の窯跡がいくつもこの付近にあるのに気がつき、更にこれを調べたところ、平安朝の須恵器という焼きものが焼かれたもので、沢山の破片がその周りに散らばっているのを発見しました。それで、昭和二十九年頃から、これらの古窯の数々を捜索したり、場合によってはこれを発掘したりしたので、私の家は古窯から持ち帰った陶器の破片で身動きも出来ないほどになりました。その後数年間平安朝の陶器一般を調べている内に、どうして

もこれに続く鎌倉時代の陶器も調べなければならなくなりました。ところが、猿投山の西北麓に在る瀬戸で作られた多数の焼きものの鎌倉時代以後のものに、他所でない特殊なもののあるのに気が付きました。それは、陶磁器で作られたこま犬であります。陶磁のこま犬を作つて神社や寺へ奉納するという習慣が、尾張、美濃、三河の陶磁地帯に鎌倉時代以後起つたのを知りました。そもそも、日本で現在こま犬と言っているのは、元は獅子像です。獅子ですから、日本や中国には居りません。遠くアフリカまたは中近東に生息している獅子は、その地方でも昔から百獣の王として尊敬せられ、絵画や彫刻に沢山用いられて居ります。それで紀元一世紀前後、パキスタンのガンダラ地方で仏像が初めて作られま



したが、この時にすでに本尊仏の前に一對の獅子像の置かれたのが少数作に残つて居ります。これがインドを経て中国へ入つたので、魏・周・隋・唐などの時代の仏像石にはこうしたものが沢山あります。獅子像も伝わつた国と時代とを反映して色々変化しました。これが日本へ最初に入つてきたのは、いつかははっきりわかりませんが、私は仏像の最初の伝来と余り距りのない時に入つてきたものと思ひます。その一例として、法隆寺の金堂の焼けた壁画には、本尊仏の前に一對の獅子像のあるのが少なくとも四面にあります。そして、日本へ輸入された獅子像は次第に日本化して、犬のような形になって来ます。日本におけるこま犬には、素材

が絵画のもの、石のもの、鉄のもの、木のもの等色々ありますが、陶磁器によつたこま犬というのは世界でも数が少なく、日本でもこの瀬戸を中心とする陶磁器地帯以外では、殆んど作られていないのであります。そして、その形や釉薬等から製作年代の考証が比較的的でありますし、徳川時代以降のものについては、製作年代、神社への奉納者、または製作者の名前等を入れる習慣が広くおこなわれて居ります。徳川時代に作られた陶磁器のこま犬の約三分の一には年号が入つて居りましょう。これは、日本の陶磁史を調べる上において貴重な第一の資料であると考えたので、私は手の届く限り方々の人に頼んで陶磁のこま犬を集めてみましたら、続々と集まつて

来て、現在私のところには、陶磁器のこま犬が二百体ぐらゐあります。ところで、人間の収集癖と申しますか、欲と言うものはきりないもので、前から私は自分の体力、財力、智力等からいつて、こま犬の蒐集は陶磁のもの以外へ出てはならないと自ら戒めては居りましたが、獅子像が長い年月を経て中近東からインド、中国、朝鮮、日本と渡つて来た経路にある実物が少なくとも一つぐらゐはほしいということになりました。たまたま東京のある骨董屋で、ガンダラの石の仏像の台の下にこま犬が一對彫られて居るのを見つけて、これは珍らしいと思ひ購入の話をして居る内に、残念なこととに他の人に買われてしまいました。それから、またまもなく、その骨董屋の店先で隋時代の仏像石を見付けました。話によるとこれは世界大戦中に九州で戦災を受けてばらばらになつたが、その破片をセメントで固めたとかで疵や直しの多いものでした。それには四側面に幾つもの仏像が彫られて居りますが、仏像の頭の無いのやら、手足のかけたのやらありますが、どうやら大体の形は出来て居りました。よく見ますと、その正面の仏像の脚の下に一對のこま犬が外

向きに刻み込まれて居り、隋の時代の開皇二年という年銘があるということ、それなら紀元約五八〇年ぐらゐのものであります。まごまごして居てまた他人の手に渡つては残念だと思ひ切つてこれを買いました。ところが高さ一三三種、横幅五十種、縦幅二二種の石で重くてとも一人や二人では動きません。後で私の家へ持つてこさせて建てましたが、四人の男でも仲々運搬が困難でした。これは元来屋外に建てられたものらしいが、中国と違って日本は湿気が多い為に庭に置くとなの方から昔がはえて腐蝕してしまうからどうしても屋根をかけなければならぬということになりました。その時

電気系三学科の改組について

京都大学教授 近藤 文治
昭和十八年卒

京大工學部の電気系三学科(電気工學科・電子工學科・電気工學第二学科)は去る四月一日付で講座名の変更・講座の移籍などの改組が行なわれ、それに伴つて教官の大移動が行なわれた。その結果各教室が六講座・学生定員四〇名の標準編成となり、別表のような構成となつた。このような改組

丁度よく私の住んで居る豊田市のある神社の小さな秋葉神社の祠を改築することになつたので、その古いのを譲つてもらひ自分の屋敷の一隅へ立てました。屋根と柱だけを利用して、仏像石が四方から眺められるような形にしました。それが掲載の写真であります。そうして私の屋敷の戌亥の隅にそれを置いて朝夕眺めて一人北叟笑んで居る次第で、これを自分だけは「こま大神社」と呼んで居ります。

以上が大正十三年卒業の当年七十三才の老電気技術者の近況を伝えるささやかな余技に関するとりとめのない話であります。

は主として法制上のことで、各教官の居室、学内電話番号などは従来通りでただ所属だけが変わつたに過ぎない。また電気系三教室では従来より後に述べるような系運営を行なつてきたので、研究・教育の面でもこの改組に伴つて不連続の変更は一切生じない。さてこのような改組がなぜ行な

われたのか、電気系教室運営の現状はどうなのか、この機会に少し紙面をかりて説明しておきたい。さて京都大学工学部にあつては電気系学科として、電気工學科(明治三十年創設)・電子工學科(昭和二十九年創設)および電気工學第二学科(昭和三十六年創設)の三学科がある。しかしこれら三学科は互に独立した学科というよりは、むしろこれを一本化して、電気系学科として互に有機的に関連づけて運営され、研究の推進および学生の教育に當つて来た。

このような教室の細分化の傾向は、この善悪は別として、最近における工学の急速な発展に伴なう専門の細分化に対応するものであつた。すなわち文部省は、過去二十年余の工学部の大拡張に當つて、既設の学科の講座増設という形を好まず、専門の細分化に呼応して新教室を増設するという方針を打出したためである。われらの電気系三教室もこのような方針に沿つて産まれたものである。昭和二十九年、従来の電気工學科は発送配電・電気機器などいわゆる強電工學の外に有線・無線通信などいわゆる弱電工學をも包含するという性格はそのままにして、新しい電気工學の分野であるエレクトロニクスを教育研究する学科とし

て五講座・学生定員二十名(その後間もなく三十五名まで増員された。)の電子工學科が発足した。當時はエレクトロニクスの創生期で一般にはエレクトロニクスなる言葉さえも殆んど理解されてはいなかつたが、このような時代に、マイクロ波を中心とする新しい通信工學の分野、電子材料を中心とする物性工學および自動制御工學など、今日のエレクトロニクスの姿を誤りなく予見し、わが国他大に先駆け昭和二十九年に電子工學科を発足せしめたのであつて、関係者の先見の明に改めて敬意を表する次第である。

當時は電子計算機はまだ研究段階で、実用の域には程遠い状態であつたが、昭和三十年代後半には、トランジスタをはじめ半導体工學の輝かしい成果に支えられて実用の域に達すると共に、その情報処理能力の偉大さは各方面に大きな変革をもたらした。学問分野からいって兄弟関係にある通信工學はもちろん、強電工學の分野でも、従来の個々の電気機器や送配電設備を中心とする学問体系の外に、系統全体としての特性を究明し、その最も効率的な在り方や運用を究明するいわゆるシステム工學の分野が発達するようになって来た。このような状態に鑑みて、昭和三十六年、電気工學、第二学

科が設置された。この学科は、電気工學の立場からするシステム工學および半導体・計算機・情報処理など新しいエレクトロニクスの分野を包含する八講座学生定員五十名の学科として発足した。以上が電気系三学科の發展の歴史である。これからも明らかなように、これら三学科の専門分野は、互に入込んでいて、それぞれ特徴はあるにしても、相互に密接に関連し合つて居る。このような事情もあつて、電気系学科においては昭和二十九年電子工學科の創設以来一貫して実質的には一本化して、電気系として運用され、研究教育を行なつて来た。このような系運営の必要性は、各教室所属講座の学問上の専門分野が互に乱れていること他に、各教室毎の教官の教(講座教)や職員の数に著しいアンバランスがあり、各教室を独立に運用することが不可能に近い状態であること、研究面はさておき、教育の上では細分化された狭い専門分野で教育するよりある程度広い分野で教育することの方がより望ましいこと(この思想は古くから電気工學科に一貫して流れている思想である。)など多くの理由に基づくものであつた。しかし今日でも、系の概念は法的には認められてはおらず、あくまで方便であつて、法的には学

科が構成単位となっている。

ところが系運営の実績もすでに十数年に及び、その後系の概念は他学科にも浸透し、現在では、電気系の他、機械系、土木系、建築系、金属系ができています。これら系では、教室の運営は所属教室を一つにした系教室会議で行なわれ、入学許可にしても、各教室の定員を系毎に合算したものを基礎にして一括して行なわれて来た。さらにカリキュラムも一昨年大きく改め、電気系三学科の全学生に対して一つのカリキュラムを課し、選択によって、四つのコースすなわち①エネルギー②通信③情報、制御④物性のいずれかを修得できるようにした。またその選択のアドバイスのため、原則として講師以上の教官が一学年四人程度の学生を担任し、三・四年を通じて履習についての個人指導を行なうようにするなど系運営の実が上るよう努めている。

しかるに昨年電気工学第二学科に所属していた計算機組織学・情報工学の二講座を抽出し情報工学科が新設されるに至った。このことについては昨年の本紙上に清野教授が詳しく報告されているのでここでは省略する。これに伴って情報・制御コースの編成をどうするかという問題が生じたので、これを機会に電気系学科のかかえ

ていたつぎのような問題をも併せて解決しようと試みた。すなわち(イ)電気工学第二学科発足後の学問の発展にどう対処するか。(ロ)各教室の講座数および学生定員のアンバランス(電気工学科八講座学生定員五十名、電子工学科五講座学生定員四十名、電気工学第二学科六講座四十名)を訂正し、各六講座学生定員四十名の標準編成とし、教育面での負担を均等化し、系運営する。(ハ)各教室の性格・特徴を明らかにし、各学科の専門領域を明確にする。特に電子工学関係の講座が、電子工学科ならびに電気工学第二学科に所属しているのを統合する。(ニ)各教室の助手以下の定員の不足分を充足する。

以上の諸点をふまえて、改組に当ってはまず電気系三学科の性格をつぎのように定義した。

電気工学科―電気工学の基礎および電気エネルギーの発生・伝達の理論ならびにその応用について教授研究する学科。

電子工学科―物質を電子論的・量子論的立場から究明し、これを工学的装置へ発展させるための基礎および応用について教授研究する学科。

電気工学第二学科―通信システム・電力システム・自動制御など電気系工学の基礎およびその応用を教授研究する学科。

このような観点から行なった改組の結果が左表のとおりである。またこの改組によって三教室の条件が揃い、教室間の壁はさらに少なくなり、系運営の実効は益々々るものと期待され、従来にも増し

て系運営を強化する方針である。最後に卒業生各位の忌憚のないご批判と温かいご援助を今後とも賜りますようお願い申し上げます。

改組後の電気系3学科の現況

学科	講座名	教授・助教授・講師
電気工学科	電気磁気工学	卯本：— 板谷：百田 林(宗)：相馬 林(千)：上田 大谷：松原 阪口：野口
	電気制御工学	—
	電気配電工学	—
電子工学科	電子物理学	高木：津田 川端：— 田中：佐々木 池上：中島 —：小倉
	電子回路工学	—
	電子波工学	—
電気工学第二学科	電気動力工学	木嶋：— 近藤：安藤 上之：岡田 —：西川 前田：長尾 木村：— —：鷹尾
	電気制御工学	—
	電気通信工学	—

最近のレーダ

三菱電機 昭和二十八(新)年卒

近藤輝夫



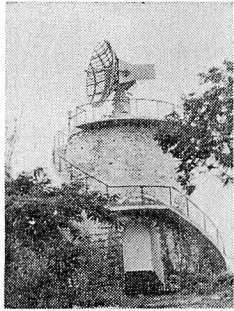
今年梅雨あけが例年になく早く、六月の終りにはもう気の早い猛暑がやって来て、暑さに慣れな

い体に入こたえたが、そう思っている間に、早いもので、もう颯風のシーズンが、近付いて来て居る。

颯風の頃になると、急に一般人々にも身近かに感じられるのが、気象観測用のレーダである。

「室戸岬の南方海上何百軒の地点を、北々東に向って、毎時何軒の速度で接近中」といった、戦中派

の人達の記憶が、一瞬二十年前に遡る様なこのときのニュースが聞かれるのも、この頃である。天気予報があまり当たらない事や、颯風の進路の予測が往々にしてはずれる事があるのは、観測点のデータ不足や、予測のプログラムの複雑さに起因するもので、これは観測手段としてのレーダの故ではない事は、一言云っておかねばならないが、それは兎も角、颯風の目の動きは、時々刻々、レーダ画像の上ではっきり捉えられる。「富士山レーダの観測によれば」とニュースでもよく云って居るが、この剣が峰には、観測半径八百軒に及ぶ、世界一の大形レーダが、東京からのリモコンで動いて居り、日本本島をすっぽりその観測範囲に包み込んで颯風の襲来をがっちり見張って居るのである。これ等の技術は、海外にも大いに買われて、世界中に到る所で、我国のレーダが活躍して居る。去年東バキスタンを襲ったあの非情のサイクロンをいち早く予報したのも、国連世界気象機構の低開発国援助計画によりカリブ海諸島に設置され、北米本土へのハリケーン接近を予測する五台のレーダも、すべて日本製である。先日欧米出張の帰路、機会があつて、カリブ海諸島に建設中のレーダ基地を訪ねたが、古い植民地時代の名残りの、



シュガーミルと呼ばれる石造りの、円錐形の風車の塔を改造した上にレーダーアンテナが載っている、背景のカリビアン・ブルーと呼ばれる、硝子の様に透明な海岸線と、不思議な調和を保って居り独立したばかりの現地の人々によって立派に運用されて居るのを見て、深い感動を覚えた。

気象用レーダーの他にも、幅狭する航空機の運行の安全を守る、各種航空管制用の地上設備や、搭載機器を始めとして、宇宙観測用ロケット、人工衛星の自動追尾レーダー、テレメータ受信装置等があり、更に発展して宇宙通信用の人工衛星追尾アンテナの技術にも繋がって居る。本来データ収集のセンサであるレーダーは、前記の様な目的の有る無しの情報を探るためにマグネトロンを発振器に使った、比較的簡単な初期の方式より、次第に多次元の、より高度のデータ収集を目的としたものに発展して行ったのは当然の傾向である。電波の高周波エネルギーのみを利用して、有る無しを知った初

期のものら、周波数や、位相の変化を利用して、種々の測定が出来る様になる為には、大出力のバルス尖頭電力を、安定に発振、増幅出来るための電子回路や電子管等の関連技術の進歩に俟たねばならなかった。これ等が工業的にも利用出来る様になって始めて、目標物の移動速度を正確に測つたり、移動目標と固定目標や、地面、海面からの反射とを区別したり、距離や高度の精密測定等も出来る様になったのである。

その後、数マイクロ秒乃至数百マイクロ秒の間持続する短いレーダ送信バルスの高周波信号に、周波数変調をかけるバルス圧縮レーダ方式が出現した。これは一定のエネルギーを送るのに、送信時にバルス幅を広げる事によって、送信バルスの尖頭値を抑え、これによって送信機電源を小形化すると共に、一方受信時には、周波数変調によって広がったスペクトラム成分に相当する値に迄バルス幅を圧縮受信し、バルス幅によって決まる、距離の分解能を劣化させないという新しいレーダ方式である。この方式はマグネトロンの発明以来の、レーダ技術界に於ける最大の成果として高く評価され、最近あらゆる種類の、高級レーダに應用されて居る。この方式は又、一定の波形バルスを、最良

の信号対雑音比で受信する為の所謂マッチト、フィルタ理論の見事な応用例であつて、この理論の展開については、筆者が大学院在学中、前田教授から御教授頂いた情報理論、フーリエ積分等が有効な手段であり、理論的にも大変面白く、大きな成果が上つて居る。一方その進歩の目覚ましい電子計算機が、データ収集のセンサであるレーダと結びつき、システム化されるのも、当然の趨勢である。それも従来のレーダとの組み合わせでは、レーダアンテナが機械的に回転して収集したデータを、後で計算機が処理するだけであつたが、最近の電子走査形のアンテナでは、電波レンズや反射鏡の表面に、電氣的に制御出来る移相器を多数配列して、夫々の点に於ける電波の位相を変える事によりビームを任意の方向に向けられるので、これをセンサとして使うと、電子計算機の命ずるままに、必要とする空間のデータを素早く集めて来る事が出来る様になった。所謂コンピュータオリエンテッドなレーダと呼ばれるこの種の大形のレーダには、米国の防空に使われて居る建設費二百億ドルに達するものがあり、一方航空機に搭載出来る様な小形のものもある。自然界には蜂や鳩の帰巣本能、イルカの探知能力の様に、解明されていない

センサーがまだまだ沢山あり、最近の人間界では、これ等自然界のセンサをお手本にする事が増えて来た。先日アメリカのさるアンテナ(空中線)メーカーのカタログの表紙に「当社は世の中で二番目に良好なアンテナを作つて居ます。」と広告があり、そこには蝶のアンテナ(触角)の写真が大寫しに載つて居た。前述の電子走査レーダでも、丁度昆虫の単眼と複眼に相当する眼を持ったものが出現した。これは一つ一つが、手の中にすっぽり入つてしまう様な小形のレーダで、その中に、アンテナから送信機、受信機に至る迄の装置と、計算機から電氣的に制御される移相器を内蔵して居て、これを何百、何千個と集めてアンテナ群を構成して、大形のレーダにしたものである。アクティブ素子として半導体を用い、セラミック

や石英の基板上に印刷技術で金箔の模様を作り、これを高周波の回路や伝送路として使用する、マイクロ波ICの技術を用いたもので、従来使われて居た雨樋の様な導波管と違って、極度に小形化、軽量化が可能となり、一つのレーダの中の繰り返しが増えて、量産化も容易になるものである。

最近のレーダでは、この他、マイクロ波ホログラムから、航空写真の様な実像を再生して、これを用いて地上の鉱脈を探る事も試みられて居る。この様にエレクトロニクス各分野の技術の進歩と共に、総合技術の精華であるレーダは、今後益々新しい応用分野が拓けて行くので、吾々レーダ技術の研究と新機種の開発、設計に携わる者にとつても、夢は限りなく、薔薇色の未来へと、広がって行くのである。

物量とその影響

徳島大学工学部 昭和九年卒

仁田 工 吉

日本が何とか輸出により外貨の獲得を念願した過去と比べ、いまは莫大な輸出货量に一面誠に慶賀にたえぬわけですが、他面外貨過大で、アメリカから苦情を言われる時代。いうまでもなく輸出货量の多いのがその原因。

のは昔からのこと乍ら、生産量が肥大となつたそのカス処理が問題。海水汚染、公害等々。これも量が多いのが原因。

物の生産すればそのカスが出る

数の少なかつた昔の大学生に対し、莫大な数となつた現在では学生問題もまたマスキの取上げるところとなる。人数少なければ笑

趣味と娯楽

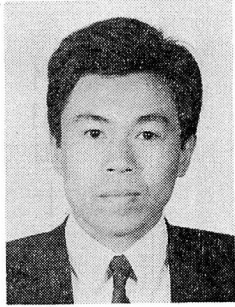
京都大学工学部助手 宮下豊勝

つて済ませること。その学生運動のスローガンにどこの大学も沖繩問題、大学公開等々。最も易きに感じた感じ。気宇廣大に千島返還、鉄のカーテン除去等を唱えてはどうなるか。

尤も数多くなつた為のよい面

大学での人と人とのふれ合いを見ていますと、何か、人間的な幅の広いふれ合いがなく、たいてい事務的、または、研究上の事だけでの狭いふれ合いに終っている感じがします。もっとも、同じ研究室内の者同志は色々な面で交流があるようですが。しかし、若い同年輩の者同志に偏っているようです。

ある男性が、テニスに行った折に、同じ仕事をしている女性に、休憩の時に、仕事の話をしました所、その女性から「テニスに来て



か、最近の学生の中には昔には無かつたかと思える程優秀な学生が、地方大学にもごく小教乍ら存在していることを付言しておきたい。この方は数が少なく目立たぬようですが。

まで仕事の話ですか。」と言われているのを横で聞いていて、この女性の言う通りだなと思つたことがあります。確かに仕事は、いやいや処理するものではなく、意欲を持って、人生の大部分を占めるものとして、積極的に取組んでい

るものですが、何か、スポーツをしている時にまで、話題が仕事の話になるのは、人間的に幅の狭い感じがします。高校時代に、誰だつたかの随筆に「子供にとつて遊びは全生活であるが、大人にとつて遊びは娯楽である。」といつた内容のことが書かれてあつて、なるほどと思つていましたが、よく考えてみると問題があるようです。現実には確

にそうですが、理想的な形としては、仕事と趣味と合わせて全生活であるべきではないでしょうか。趣味のない仕事だけの生活をして

いる人は、無味乾燥だし、また、娯乐的になつていゝ人は、一見人間的に見えるが、不良的と言わざるを得ないと思ひます。いやな仕事でもないやな顔せず、結局あきらめて、てきぱきと処理する勤勉な人が、仕事が終ると町の繁華街やレジャー施設をうろついて過ぐす世相は、非常に歪んでいると思ひます。

本当にすばらしい人生を送らうとすれば、仕事は、勿論、意欲的にできるものにならなければならぬし、また、人間味豊かな性格を備えるべきだし、さらに、健康な体でなければならぬ。この三点を積極的に追究してゆかねばならないと思ひます。

やりがいのある仕事をする事は、なかなか難しいが、仕事での矛盾や問題を仕事のととの娯楽でまぎらわすのでなくて、本当に働きたいのある大学にしていくなために、目上の人と意見の対立をして、少々気を使つたりしても、前向きに解決していかなければ、いつまでたつても良くならないと思ひます。そうすると、娯楽が、もつと内容のある趣味に取つて替る事ができるのではないのでしょうか。

年輩の人で趣味がないため時間がすくせず、かといつて、いままざら何か始めようとしてもできないという人を時折みかけます。若い時に勉強ばかりせず、また娯楽にうつつをぬかさず、何か趣味を持

つて追究することは、年を取つてから人生をもつと豊かにすることにもなると思ひます。この悪い面の現代の特徴は、無差別的にテレビにかじりついていゝ人が多いことです。趣味がないと、自ら時間を過ごせない。そこで、ついテレビを見る。それが習慣になつてしまふ。昔は、子供が食事をしながら何か他のことをすると叱られたものですが、その親達が今では、食事中である人が来ていゝようがテレビをかけたばなしである。人の家を訪問した時に、テレビを見せられるのは非常に心外です。何もテレビを見るために来たのではない。久し振りに会つて色々互いに話をしたいのです。だのに横からテレビを割り込ませられる。まさに、テレビの力に身も心も負けてしまつていゝ世相だと思ひます。しかも、今ではそれに気付かなくなつていゝ人が多い。非常に恐ろしいことです。このような情

況だから、テレビでどのような番組を送るかは、その国の体制を維持するために不可欠のものとして、為政者は重視している。だから、よほど我々が、それに対してはつきりした態度を持たない限り、支配者によつて作り出される雰囲気、考え方に、無批判的にのみ込まれてしまふ。その一つの解決法は、テレビを見なくても時間

をすくせるようにすることです。でも、一人で頑張つても、やはり、一人の人間では誘惑に弱いもので、すぐ安きにたつてしまふことが多い。同じ趣味のものが集つて、互いに刺激しあひながら進めていくと実りあるものができると思ひます。電気系教室の内でも、若い者は少々サークルを作つていゝ。コーラス、テニス、労音、労演、手芸、その他二三人でグループを作つていゝものもある。しかし、最近では、これらのサークルも低調で、ごく好きな者だけの参加になつていゝようです。

文化芸術の各分野での愛好家サークルのようなものを、もつと作つて交流したら、教室内の人間関係も豊かになるのではないかと思ひます。教授の先生方も、年が離れていゝ我々助手から、無趣味なのかと誤解されている人が多く、よう、話を伺つてみると、かなり色々と言つてこられたという先生がおられます。そのような先生方を含めて若い者も一緒にサークルを作つて色々話をしていけば、もつと人間的な関係が生まれるのではないのでしょうか。

懇話会を、名誉教授等の先生方の説教や、ハレンチな話を聞かされる場としてではなくて、このよ

うな人間交流の場として、新しく出発させてほしい。

昭和四十六年度洛友会総会

昭和四十六年度洛友会総会は、六月五日(土)午後、東京目黒の八芳園において開かれた。

当日午後三時、東京支部評議委員会が開かれ、別掲の新役員を選任し、四十五年度の決算報告、四十六年度の予算審議が行なわれ、四時からの東京支部総会においてこれらが可決された。

午後四時三十分から洛友会総会に入り、先ず副会長の前田憲一先生から御挨拶があり、次いで幹事の山本茂雄氏より予算関係を報告され可決された後、幹事の近藤文治先生から、最近の教室の状況についてお話があり、情報工学科の新設、新しい教授の就任のニュー

スなど、来会者に感銘を与えた。

引き続き午後五時三十分より懇親会に移り、前田副会長の乾杯の音頭に始まり、吉岡東京支部長より喜寿を迎えられた浅賀春一氏に記念品を贈呈した後、参会者七十三名により盛大なパーティーが開かれ、旧交を温ため、午後七時半散会した。

総会出席者

明45古田正康、大2宮崎駒吉、4真崎尚忠、6大西冬蔵、7乙葉真一、楠本宗次郎、8高見祥平、9小沢仙吉、10西村弁造、11山口信助、12小森修二、13菊地保夫、本多静雄、14一本松珠璣、西原藤吉、15石川辰雄、山本三郎、昭2岩本種昌、大島文平、交川有、3浜崎涼、4安達達、5平田憲一、真壁昌一、6足立卓夫、上西亮二、野際幸夫、西本憲三、山本茂雄、吉田洪二、7石川清、前田憲一、松井登兵、吉岡俊男、8田井梁之、西山安三、和氣幸太郎、9石川弘文、市村宗明、喜田村善一、10北村芳雄、佐野一雄、塩沢弘、11古池弘正、12石崎達弥、平田稔、正木知己、14笹谷昌男、16・3高橋

碩男、16・12山本幹次、18近藤文治、19木村小一、20老田他四郎、鈴木侃、23服部周三、25沢田新一郎、山田昭二郎、27重本直三、室賀弘、28武藤良介、28近藤貞吉、29立山尚武、上村隆俊、間瀬光朗村松和男、京本義章、波多野竜、森幹夫、22木村清治、40田島孝、平松幸生、46下間一成、溝大7浅賀春一、9井上弥三郎、10中村秀治、昭3小松原政次、12中野壮二

東京支部新役員

顧問 大7 乙葉 真一
支部長 昭7 吉岡 俊男
副支部長 昭8 和氣幸太郎
総務幹事 昭27 室賀 弘
会計幹事 昭28(新) 近藤 貞吉

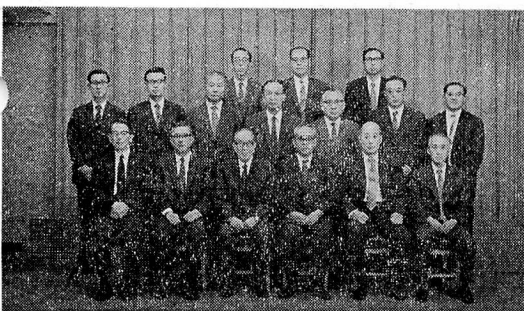
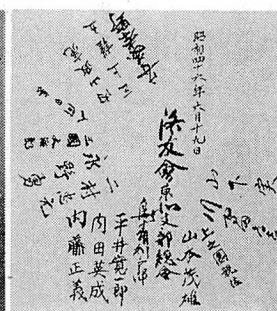
東北支部総会

第六回東北支部総会は青葉若葉に囲まれた仙台の中心部に近い共済会館に於て六月十九日開催されました。

今回は、鳥養会長、上之園教授、山本幹事を京都よりお迎えし支部よりは、平井支部長、内田副支部長をはじめ、青森、秋田などの遠隔地より十三名の出席を得ました。

総会は平井支部長の挨拶にはじまり、鳥養会長よりの御挨拶、昭

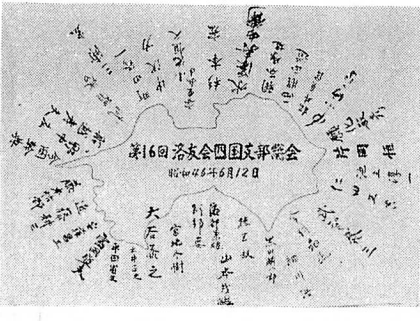
和四十五年度会計報告など議事が進められ、上之園教授よりは「トランスの耐電圧試験に於ける試験電圧の考へ方」について講話があり出席者一同大いに認識を新たに致しました。引き続き懇親会に移り鳥養会長はじめ上之園教授、山本幹事を囲んで各人の近況の披露などの団らんは洛友会ならではの雰囲気でありました。



四国支部総会

第十六回洛友会四国支部総会は去る六月十二日高松市紅羽旅館において開催された。当日は雨中にもかかわらず母校より大谷・池上両先生、本部より山本幹事のご来高を得、又会員三十四名の多数の参会を見、盛大に行なわれた。特に本年は大正四年卒の安藤先輩も参加され、又、四国外よりも片岡(昭八)、黒田(昭十一)、三浦(昭二十三)の各氏の特別参加もあり、夜の不けるまでにぎやかに歓談の一夜をすごした。

なお、四国支部の役員の一部改選があり、次のとおり決定された
支部長 阿部 要(昭8)
副支部長 原田 尚文(昭14)
幹事 今村 晶正(昭23)
土井 正之(昭23)
野中 広(昭27)
(今村幹事記)



昭和45年度収支決算書

昭和45年4月1日より昭和46年3月31日まで

収入の部

科 目	決算額	予算額
会 費	1,783,900	1,600,000
電気講習所会費	195,000	200,000
預 金 利 子	309,183	200,000
広 告 掲 載 料	909,550	1,005,550
雑 収 入	36,610	0
収 入 計	3,234,243	3,005,550
前年度繰越金	4,020,174	4,020,174
合 計	7,254,417	7,025,724

支出の部

科 目	決算額	予算額
刊 行 物 費	1,837,070	1,840,000
名簿編集費	900	40,000
同 印 刷 費	1,150,000	1,100,000
同 発 送 費	264,475	260,000
会 報 編 集 費	0	20,000
同 印 刷 費	164,500	220,000
同 発 送 費	257,195	200,000
諸 費	1,007,746	1,095,550
備 品 費	35,095	25,000
通 信 費	37,017	40,550
会 合 費	36,904	50,000
総 会 費	200,000	200,000
集 金 費	135,450	130,000
総 掛 費	312,000	400,000
旅 費	251,280	250,000
臨 時 費	70,000	70,000
懇 話 会 補 助	70,000	70,000
広 告 募 集 費	4,400	0
支 出 計	2,919,216	3,005,550
次年度繰越金	4,335,201	4,020,174
合 計	7,254,417	7,025,724

昭和46年度収支予算書

昭和46年4月1日より昭和47年3月31日まで

収入の部

科 目	予算額	前年度決算額
会 費	1,850,000	1,783,900
電気講習所会費	180,000	195,000
預 金 利 子	350,000	309,183
広 告 掲 載 料	1,200,500	909,550
雑 収 入	0	36,610
収 入 計	3,580,500	3,234,243
前年度繰越金	4,335,201	4,020,174
合 計	7,915,701	7,254,417

支出の部

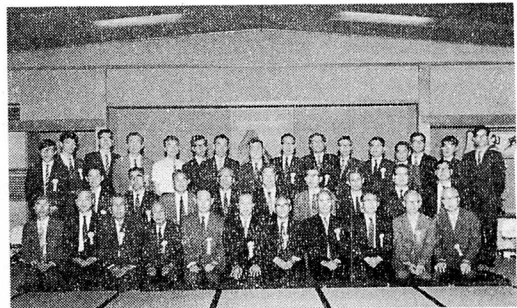
科 目	予算額	前年度決算額
刊 行 物 費	2,500,000	1,837,070
名簿編集費	10,000	900
同 印 刷 費	1,430,000	1,150,000
同 発 送 費	450,000	264,475
会 報 編 集 費	10,000	0
同 印 刷 費	300,000	164,500
同 発 送 費	300,000	257,195
諸 費	1,005,500	1,007,746
備 品 費	30,000	35,095
通 信 費	40,500	37,017
会 合 費	40,000	36,904
総 会 費	150,000	200,000
集 金 費	140,000	135,450
総 掛 費	350,000	312,000
旅 費	255,000	251,280
臨 時 費	70,000	70,000
懇 話 会 補 助	70,000	70,000
広 告 募 集 費	5,000	4,400
支 出 計	3,580,500	2,919,216
次年度繰越金	4,335,201	4,335,201
合 計	7,915,701	7,254,417

預金および現金 (昭和46年3月31日現在)

信託預金	3,760,418	郵便振替	59,707
定期預金	0	現 金	26,623
普通預金	488,212	合 計	4,335,201
当座預金	241		

大川圭三 大山大山 昭山民 昭村勝 昭杉慎 昭下珠 講大島正 講大根良 講三菅清 以上の方々が逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

訃音



四国支部総会



会員近況

今秋行なわれる第九期日本学術
会議会員選挙に、全国区(第五部
電気工学)で、前田憲一教授が、
京都大学工学部のほか電子通信、
電気、テレビジョン、情報、音響
の各学会から推薦され立候補され
ることになった。

編集後記

○盛夏の候となりましたが、会員
の皆様御健康にて御活躍のこと
と存じます。五月より六月にか
けて各支部の総会が開催され、
鳥養会長や、教室の先生のお伴
をして出席し、会員の皆様は御
目にかかる機会を得、洛友会が
益々発展しつつあることを見聞
し、御同慶に堪えません。鳥養
先生は本年八十四才になられま
したが、益々御健在にて、出来
るだけ各支部総会に出席して会
員の方々に御目にかかり度いと
申され、本年は東北・名古屋の
総会に御出席下さいました。特
に東北では平井支部長の御高配
により、一日御滞在を延ばして
青葉滴る静寂の作並温泉に御案
内頂き浮世離れた旅情を味わうこ
とが出来、大変喜んで居られま
した。
本号には、各支部総会の報告

と写真等をのせ、同時に昭和四
十五年度の決算報告並びに昭和
四十六年度の予算を、報告しま
した。

○かねてから会報の原稿について
活発な募集方法を各支部長を中
心に、幹事の方々にお願ひして
おきました所、続々と御投稿下
さいまして厚く御礼申し上げます。

本号には、中部支部長本多静
雄氏より特に御造詣の深い「こ
ま犬」の記事を冒頭に飾らして
頂きました。

又教室の最近の情況に就て、
近藤文治教授より解説して頂き
ました。電気教室も、最近の教育
改革のために、昔日と内容が一
変したことを痛感する次第です
○目下、洛友会名簿の編纂中で、
広告のことや住所変更の調査に
就て、幹事の方々や、会社の方
々に御面倒を御願ひして居りま
すが、本年度は新しい試みとし
て、名簿を従来より大きくし、
(B5版)活字も見易くする等
改訂する積りで、事務局で苦勞
して居りますが、果して御好評
を頂けるか否か、会員各位の名
簿、会報等に対する御批判を、
御投稿頂ければ幸甚に存じます
会報の一般「声」欄を設け、掲
載致し度いとも思っています。

全事 山本記)

電気評論 月刊 10日発行
電気総合月刊雑誌

46/7月号 特集・電気自動車 (送料 32円)

- 1. 電気自動車の開発の考え方.....電子技術総合研究所 小 沢 丈 夫
 - 2. 将来の電力需給における電気自動車の役割り... 電気事業連合会 小 野 野 泰 久
 - 3. 電力会社における電気自動車研究開発の現状と将来の展望
..... 東京電力 上 村 武 司
..... 中部電力 加 藤 義 春
..... 関西電力 矢 森 智 智
 - 4. 電池メーカーにおける電気自動車実用化とメーカーの立ち場
..... 湯 浅 池 淵 田 京
..... 日本電池 高 垣 德 郎
..... 松下電器産業 市 原 二 浩
福 田 雅 太 郎
由 本 一 郎
柴 田 福 夫
田 村 英 雄
 - 5. 電気自動車の実用化と自動車メーカーの立ち場.....ダイハツ工業
 - 6. 電気自動車の実用化について.....川崎重工業
 - 7. 電気自動車用電池の技術開発の方向.....大阪大学
- ☆その他、[一般論文]・[評論マンスリー]・[シリーズ]等

46/8月号 特集・電力設備と防災 (送料 28円)

- 1. 電気事業における地震対策.....公益事業局 前 田 幸 美
 - 2. 電力設備の台風対策.....東京電力 木 下 武 雄
 - 3. 発送変電設備の雷害対策.....中部電力 蛭 川 達 雄
 - 4. 水力発電所、変電所における火災対策.....関西電力 森 井 清 二
- ☆その他 [一般論文]・[評論マンスリー]・[シリーズ]等

株式会社 電気評論社 本社 京都市左京区田中大堰町49
電話 京都 (075) 701-2582
振替 京都 9906 (〒606)